※字数指定のある問いでは、特にことわりのない限り、句読点等の符号も一字分と数えます。

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。
〈問題文中の※は、終わりに注があります。また、問題文を一部改めているところがあります。〉

結論からさきに書くと、「人生の目的は自由だ」と僕は考えている。自由を獲得するために、あるいは自由を※1構築するために、僕は生きている。少なくとも、今は本気でそう考えているのである。

そもそも、自由とは何か、についてもう少し説明が必要だろう。

僕の考える自由は、普通の人が思い描くそれとは多少※2ニュアンスが違っているかもしれない。［1］、普通の人は、「子供は自由だ」「動物は自由だ」と言う。僕はその反対で、子供は不自由であり、動物もけっして自由だとは考えていない。

自由というのは、「自分の思いどおりになること」である。自由であるためには、まず「思う」ことがなければならない。次に、その思いのとおりに「行動」あるいは「思考」すること、この結果として「思ったとおりにできた」という満足を感じる。その感覚が「自由」なのだ。

子供は、あれもしたい、これもしたい、と「思う」けれど、たいていは、そのとおりにならない。大人が「駄目だ」と制限するものもあれば、自身の身体的能力が不足しているためにできないことも多いだろう。［2］、「自由にあれこれしたい」という気持ちは大人以上に持っているものの、子供はけっして自由とはいえない。はっきりいって不自由である。

動物の場合も同様で、僕が観察できるのはペットくらいだけれど、赤ちゃんのときはかなり自由になりたがる。いろいろ無謀なことをしようとする。［3］、成長して一人前になると、(A)フンベツがつくためなのか、無茶をしなくなる。生きるため以外のことでは、新しい(B)タイショウに挑戦するようなこともほとんどなくなる。新しいおもちゃを与えたときに興味を示すのは幼いときだけだ。野生の動物というのは、腹が空いたら餌を探し、敵に怯えて生きているのではないか。ほんのときどき、休んだり眠ったりできる時間はあるけれど、自分がやりたいことを考え、つぎつぎにチャレンジしているよう

には見えない。

結局、敵の目を避け、餌を探すのが彼らの生涯の大半といって良い。自由にどこかへ冒険に出ることはない。毎日決まった行動をとるのだ。そして、こんなふうに動物を見てしまうのは、僕が人間だからであり、①動物はそもそも不自由だなんて感じていないだろう。人間だけが自由な生きものだからこんな思考をするのだ。

腹が空いたら好きなものを食べる。これは「自由」な状態だろうか？

普通は、これこそ「自由の中の自由」「自由の代表格」だと認識されている(a)ふしがある。現に、「俺は好きなものさえ食べていられれば、もうそれだけで幸せだ」と豪語する人もいる。まさに、食べるために生まれてきた、といわんばかりである。②なんともまあ、動物的な感覚だなと微笑ましい。もちろん、食べるといってもいろいろな条件がある。最低限の栄養補給としての食事から、趣味的なグルメのレベルまでさまざまだ。(b)いちがいに、食べることが動物的だとはいえないかもしれない。ここで書いているのは、かなり一般的、平均的な食事のことだ。

食欲のほかにも基本的な欲求がある。寝たいときに眠り、働かなくても良いなら、一日ごろごろとなにもしないでいたい。そういう状態が「自由」だと思い描く人はわりと多いのではないか。

「誰からも文句を言われない状態」という条件も重要だと思う。普通は、なにもしないでごろごろしていたら、誰かから注意を受けるからだ。それくらい、人から文句を言われ続けている人生、というのが多くの人が(C)ケイケンする現実なのかもしれない。どういうわけか、文句を言われると気分が悪くなるように、人間は成長の(D)カテイでプログラムされる。これは、もちろん「支配」である。

少し考えてみればわかることだが、腹が空いたというのは、肉体的な欲求であり、つまり、食欲は［　］による「支配」なのである。休みたい、寝たい、というのも同様だ。体が頭脳に要求している。頭ではもっとしたいことがあるのに、体がいうことをきかない、そういう不自由な状況と考えることができる。

健康であることは、もの凄く感謝すべき幸せの一要因であることはまちがいない。病気のときには、自分の思うように行動できなくなる（ときには、思考もままならない）。誰もが「不自由」を感じるのが不健康である。

これと同様に、空腹や睡魔も、やはり、［　］による支配なのだ。もっとやりたいこと、やるべきことがあるのに、人間は生きていくために食べなければならないし、寝なければならない。作業の効率は落ちるが、「③死んでは元も■もな

い」から、しかたがない。体は、この要求をあたかも「したいこと」のように頭脳に訴え、これが「肉体的欲求」となる。思考によって導かれた「自分がやりたいこと」とは発信源が異なる。違っていることがご理解いただけるだろうか。

このような「[ ]による支配」を、悪いことだと主張しているのではない。体の欲求に応えることはとても大切だし（まっこうから拒否したら余計に不健康になる）、ときには第一優先になる。生きているかぎり逃れることができないのは紛れもない事実である。

[4]、一言だけつけ加えるなら、この「健康」が生きる目的になるという発想は矛盾しているだろう。したがって、④健康がすなわち自由ではない。健康であることが人生の喜びだというのは、僕は錯覚だと思う。それが真実ならば、生まれながらに不健康な人、自分に責任はないのに病気になった人、事故に遭って健康を奪われた人には、もう人生の喜びはない、ということになってしまう。

健康は、自由を得るための一手段ではある。また、「健康」のEテイギは人それぞれで違うし、同じ個人でも年齢や状況によって「健康」は変化する。誰だって、歳をとれば、若くて元気な状態には戻れない。それを不健康というわけではない。生きていく以上、自分の体の※3コンディションは、⑤背負わなければならない荷物である。捨てるわけにはいかないし、交換することもできない。他者と比べて、自分の荷物が重いといくら嘆いても、それで軽くなるわけでもない。朝起きた状態が、その日の※4デフォルトであり、そこから自分が今日どちらへ向かって歩きだすのか、しか日々の選択肢はないのである。自由というのは、⑥その人が歩きださなければ、絶対に得られないものだと思う。

（森博嗣 著『自由をつくる 自在に生きる』より）

※1 構築……しっかりと作り上げること。
※2 ニュアンス……言葉や表現などの微妙な意味合いのこと。
※3 コンディション……調子。状態。
※4 デフォルト……ここでは、そのものの出発点や原型の意。

問一 ══ A～Eのカタカナを、それぞれ漢字に直してていねいに書きなさい。

問二 [1]～[4]に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア しかし　イ すると　ウ だから　エ ただし　オ たとえば　カ なぜなら

問三 ～～～ a・bの語句の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

a「ふし」
ア 状態、場合
イ 旋律、調子
ウ ところ、点
エ 物の継ぎ目

b「いちがいに」
ア 絶対に
イ 多くの場合に
ウ 反対に
エ ひとまとめに

問四 ――①「動物はそもそも不自由だなんて感じていないだろう」とありますが、そう言えるのはなぜでしょうか。筆者の言う「自由」とはどのようなものかをふまえつつ、わかりやすく説明しなさい。

問五 ――②「なんともまあ、動物的な感覚だなと微笑ましい」とありますが、この表現にこめられた筆者の気持ちの説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好きなものを食べることに幸せを感じている人に、それを肯定はしないまでも一定の好意を示している。
イ 好きなものを食べることに幸せを感じている人に、あまりに動物的過ぎると冷ややかな視線を送っている。
ウ 好きなものを食べることに幸せを感じている人に、自分もそうありたいものだとうらやましさを感じている。
エ 好きなものを食べることに幸せを感じている人に、人間らしさは感じつつもあまり好ましくないと思っている。

問六 「□による支配」（問題文中に三か所あります）の□に入れるのに最も適当な語を、問題文中からぬき出して答えなさい。

問七 ――③「死んでは元も■もない」の「■」に漢字一字を入れて、適当な慣用表現を完成させなさい。

問八 ――④「健康がすなわち自由ではない」とありますが、筆者がこのように言う理由を説明した次の文のⅠ～Ⅲの□（□一つが一字を表します）に入れるのに適当な語を、問題文中よりそれぞれぬき出して答えなさい。

筆者は、人生のⅠ□□は自由だと考えているが、「健康」であることは自由の一要因ではあっても、それはそもそもⅡ□□□な欲求であって、さらに生まれつきⅢ□□□な人もいることなどから、それが生きるⅠ□□になるという考え方は矛盾、錯覚だと思っているから。

問九 ――⑤「背負わなければならない荷物」とありますが、これが表しているものの説明として適当でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の思いのままにあやつるべきもの。
イ 過大な負担であっても捨てられないもの。
ウ どうしても逃れることができないもの。
エ そのまま付き合わなければならないもの。

問十 ――⑥「その人が歩きださなければ」とありますが、これはどういうことを言っているのだと考えますか。自分の言葉で、わかりやすく説明しなさい。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

〈問題文中の※は、終わりに注があります。また、問題文を一部改めているところがあります。〉

「少年」は三月の終わりに引っ越してきて、まだ一カ月足らず。転校先である東小学校のクラスのみんな、特に男子のリーダー格のヨッちゃんとは、この一週間の間になじめなくなってしまっていた。ある日、通りがかりの団地のベランダから揚がっていたこいのぼりが風に飛ばされたのを拾って届けると、寂しそうに見えるおばさんが家の中に招き入れてくれた。家に上がった少年は、仏壇に飾られた男の子の写真に気付く……

おばさんの息子は、タケシくんという。三年生の秋、交通事故で亡くなった。生きていれば東小学校の五年生——少年と同じ五年二組だったかもしれない。仏壇に供えられた超合金ロボやトレーディングカードは少年の好きなものと一緒だったから、仲良しの友だちになれた、かもしれない。

おばさんは東小学校のことをあれこれ教えてくれた。髪の薄い校長先生のあだ名が「はげっち」だということ、秋の運動会に親子競技があること、冬になるとクラスでストーブ委員を決めること、学校のプールは真ん中が深くなっていて背が立たないかもしれない、ということ……。

ヨッちゃんの名前が出た。胸がどきんとした。タケシくんのいちばんの友だちはヨッちゃんだったらしい。

「ヨッちゃんと同じクラスなの？　じゃあ、もう友だちになったでしょ。あの子元気だし、面白いし、意外と親切なところもあるから」

タケシくんが小学校に上がって最初に仲良くなったのがヨッちゃんで、最後まで——いまでもヨッちゃんは、ときどき仏壇にお線香をあげに来てくれるのだという。

「ヨッちゃん、いろいろ面倒見てくれるから、すぐに友だちになれたでしょ」

①少年は黙ってうなずいた。一週間前までは、確かにそうだった。通学路の近道も、学校でいちばん冷たい水が出る水飲み場の場所も、教室を掃除するときの手順も、ぜんぶヨッちゃんに教わった。

「そうかあ、ヨッちゃんと友だちかあ……」

おばさんはうれしそうに微笑んで、しみじみとつぶやくように言った。勘違い——でも、そんなの、打ち消すことなんてできない。

「[　②　]」

おばさんはもっとうれしそうに言った。

少年がしかたなく「はあ……」と応えると、玄関のチャイムが鳴った。

外からドアが開く。

「おばちゃん！　こいのぼり、黒いのがなくなってる！　飛んでったんじゃないの！」

玄関に駆け込んできたのは、ヨッちゃんだった。

五時のチャイムが鳴るまで、少年はヨッちゃんと一緒にタケシくんの家にいた。おばさんに「やろう、やろう」と誘われて、三人でテレビゲームをした。タケシくんの家にあったゲームはみな、少年も三年生の頃に遊んだものだった。タケシくんが生きてれば友だちになったよな、絶対そうだよな、と少年は思う。去年発売されたシリーズの新作はもっと面白い。タケシくんが生きてれば絶対にハマっただろうな。

ヨッちゃんはゲームがうまかった。少年といい勝負——勝ったり負けたりを繰り返す二人を、「ひさしぶりにゲームすると、指と目が疲れちゃうねえ」と途中から見物に回ったおばさんは、にこにこ微笑んで見つめていた。

ヨッちゃんと仲直りをしたわけではない。ヨッちゃんは家に入って少年を見たとき、一瞬、[　③　]、という顔をした。少年も、しょうがないだろ、とにらみ返して、そっぽを向いた。

おばさんがジュースのお代わりを取りに台所に立ったとき、「さっさと帰れよ」とヨッちゃんに小声で言われ、肩を小突かれた。

少年も最初はそうするつもりだった。おばさんに嘘がばれるのが嫌だったし、④嘘をついたままタケシくんの写真に見つめられて遊ぶ自分が、もっと嫌だった。

でも、おばさんはジュースを持って戻ってくると、二人に言った。

「タケシも喜んでるわよ、ヨッちゃんに新しいお友だちができて」

帰れなくなった。⑤頬が急に熱くなり、赤くなって、そこからはいままで以上にゲームに夢中になったふりをした。ヨッちゃんも、ゲームのコントローラーを動かしながら、ときどき、テレビの画面を見つめたまま話しかけてくるようになった。

そんな二人を、おばさんはずっと――ほんとうにずうっと、にこにことうれしそうに見つめていた。

先に「さようなら」と言った少年が団地の建物の外に出ても、ヨッちゃんはなかなか出てこなかった。放っておいて帰るつもりで自転車にまたがったが、⑥このまま帰ってしまうのも、なんとなく嫌だった。困ったなあと思ってタケシくんの家のベランダを見上げていたら、窓が開いて、おばさんがベランダに顔を出した。少年に気づくと、「ちょっと待っててね」と笑って声をかけ、フェンスからこいのぼりの竿をはずした。

しばらくたって外に出てきたヨッちゃんは、※真鯉だけをつないだ竿を持っていた。

「すぐ帰らないとヤバい？」

少年に顔を向けずに訊いた。

「べつに……いいけど」

「片手ハンドル、できる？」

「自転車の？」

簡単だよ、そんなの、と笑った。道が平らだったら両手を離しても漕げる。

ヨッちゃんはこいのぼりを少年に渡した。

「おまえに持たせてやる」

「……どうするの？」

「ついて来いよ。タケシのこいのぼり、ぴんとなるように持ってろよ」

そう言って、自分の自転車のペダルを勢いよく踏み込んだ。

少年はあわてて追いかける。風を呑み込んだこいのぼりは、尾びれまでぴんと張って泳ぎはじめた。意外と重い。しっかりと竿を握っていないと、飛んでいってしまいそうだ。

ヨッちゃんの自転車は団地を抜けて、細い道を何度も曲がっていく。片手ハンドルの運転ではなかなかスピードを上げられない。ヨッちゃんも途中でブレーキをかけたり自転車を停めたりして、少年を待ってくれた。いままでとは違う――転校

したての頃とも違う笑い方だった。タケシくんと一緒だった頃もこんなふうに笑っていたのかもしれない。そう思うと、急にうれしくなり、でも急に悲しくもなって、竿を [1] 強く握りしめた。

河原に出た。空も、川も、土手も、遠くの山も、夕焼けに赤く染まっていた。

ヨッちゃんは土手のサイクリングロードに出ると自転車を停め、少年からこいのぼりを受け取った。

「俺ら……友だちなんだって？」

少年は、ごめん、とうつむいた。⑦おばさんが勝手に勘違いしただけだ、とは言いたくなかった。

「べつにいいけど」

ヨッちゃんはまたさっきのように笑って、手に持った竿を振ってこいのぼりを泳がせた。

「タケシって……すげえいい奴だったの。サイコーだった。俺、いまでも親友だから」

「……うん」

「でも……おばさん、もう来るなって。ヨッちゃんは新しい友だちをどんどんつくりなさい、って……そんなのヤだよなあ、関係ないよなあ、俺が友だちつくるのとかつくんないのとか、自分の勝手だよなあ……」

ヨッちゃんは、[　] 竿を振り回す。こいのぼりは身をくねらせ、[2] 音をたてて泳ぐ。

「こいのぼり、ベランダからだと、川が見えないんだ。俺らいつも河原で遊んでたから、見せてやろうかな、って」

[3] 笑うヨッちゃんを、少年はじっと見つめた。ヨッちゃんはそのまなざしに気づくと、ちょっと怒った顔になって、「拾ってくれてサンキュー」と言った。

少年は黙って、首を横に振った。

「あそこの橋渡って、[4] 回って、向こうの橋を通って帰るから」

向こう岸を指さして言ったヨッちゃんは、行こうぜ、とペダルを踏み込んだ。

ハンドルが揺れる。自転車が道幅いっぱいに蛇行する。片手ハンドルで自転車を漕ぐのは、あまり得意ではなさそうだ。

少年はヨッちゃんの自転車に並んで、手を差し伸べた。「持ってやろうか」と声をかけると、ヨッちゃんは少し間をおいて「悪い」と竿を受け取ったあと、ほんとうはもっと別の言葉を言わなきゃいけなかった

のかもな、と思った。⑧でも、そういうのって、いいんだよ、もう、と竿を持った右手を高く掲げた。
こいのぼりが泳ぐ。金色にふちどられたウロコが、夕陽を浴びてきらきらと光る。
ヨッちゃんの自転車が前に出た。少年は友だちを追いかける。右手で、友だちの友だちを握りしめる。振り向いたヨッちゃんが、「転ぶなよお」と笑った。

（重松　清　作『友だちの友だち』より）

※　真鯉……（こいのぼりの中の）黒い色のこい。

問一　——①「少年は黙ってうなずいた」とありますが、この時の「少年」の気持ちの説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　初対面のおばさんに対して、まだ人見知りする気持ちがぬけないでいる。
イ　大嫌いなヨッちゃんの話題に、あまり愉快でない気持ちを感じている。
ウ　最初は確かにそうだったが今は違うという、複雑な思いを抱いている。
エ　ヨッちゃんは面倒見がよいという話を、内心信じられない気持ちでいる。

問二　［②］［③］に入れるのに最も適当な言葉を、それぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

［②］
ア　じゃあ、タケシとも友だちってことだね
イ　じゃあ、ここで遊んでいってもだいじょうぶだね
ウ　じゃあ、明日ヨッちゃんにもよろしくね
エ　じゃあ、おみやげのお菓子をいっぱいあげるわね

［③］
ア　おまえみたいな奴なんかさっさと帰れよ
イ　なんでおまえなんかがここにいるんだよ
ウ　こんなところまで俺を追ってきたのかよ
エ　いつからタケシと友だちになったんだよ

問三　——④「嘘をついたままタケシくんの写真に見つめられて遊ぶ自分が、もっと嫌だった」とありますが、「少年」がそのように感じたのはなぜだと思いますか。自分の言葉で、わかりやすく説明しなさい。

問四　——⑤「頬が急に熱くなり、赤くなって、そこからはいままで以上にゲームに夢中になったふりをした」とありますが、その理由を、わかりやすく説明しなさい。

問五　――⑥「このまま帰ってしまうのも、なんとなく嫌だった」とありますが、その理由の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　大切な子供をなくして寂しい思いでいっぱいのおばさん一人だけを残し、このまま帰ってしまうのでは、あまりにかわいそうだと同情したから。

イ　転校してきたばかりで友だちがいなくて寂しかったところに、せっかく二人も友だちができたので、このままもう少し一緒に遊びたいと思ったから。

ウ　思いがけずヨッちゃんと友だちのふりをして遊ぶはめになったが、そのようにつくろったまま終わったのでは、どうにも気持ちがすっきりしなかったから。

エ　ひょんなことから大嫌いなヨッちゃんと一緒に遊んでしまったが、そんなふうに自分の本心をあざむいたままで帰ることに、とても耐えられないと感じたから。

問六　次の文を入れるのに最も適当な所を問題文中から探し、その直前の五字をぬき出して答えなさい。

「かわってやろうか」と言われて、「ぜんぜん平気だよ」と応えると、ふうん、と笑われた。

問七　[1]～[4]に入れるのに最も適当な語を、それぞれ次のア～クの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　がさがさと　　イ　ぎゅっと　　ウ　ぐるーっと　　エ　ばさばさと
オ　ぴんと　　カ　ふふっと　　キ　ふわーっと　　ク　へへっと

問八　――⑦「おばさんが勝手に勘違いしただけだ、とは言いたくなかった」とありますが、「少年」がそのように「言いたくなかった」のはなぜですか。二十字以上三十字以内で説明しなさい。

問九　[　　]に入れるのに最も適当な語句を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　うれしそうに　　イ　悲しそうに　　ウ　悔しそうに　　エ　切なそうに

問十　――⑧「でも、そういうのって、いいんだよ、もう」とありますが、「少年」がこのように思ったのはなぜですか。二十字以上三十字以内で説明しなさい。

二〇一〇年度 中学校入学試験（第一回）

〔国語〕 解答用紙

一

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九	問十
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
A B C D E	1 2 3 4	a b					Ⅰ Ⅱ Ⅲ		

二

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八	問九	問十
*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	② ③					1 2 3 4			

氏名

受験番号

得点 *